

つごもりの新月はまた満ちて、月日はめぐる

第2章 富士のかあちゃん ①



写真1 カフェ時代の島崎夫妻

並び、軒にはボンボリが下がつていて、ガラッと開けると、その先にはさらに襖があった。い

ちげん客はたいていが気後れしてしまったのである。

でもこの変わった造作と、素材すべてこだわる本格的な料

的活用構想を所有者とひざつきあわせて熱く語り、現在の桐生市有鄰館の実現に道を開いたのが、この富士の一室であった

こと。これは知る人ぞ知る話だ。

配、芸者衆との関係づくり、それらの仕事で、往時の桐生にはそのすべてに傑出した名物女将が幾人も存在した。録は昭和30年代、市内の飲食店の三大女傑

の土を踏んだ年である。金融恐慌が始まっていた。一方で、新たな芽吹きが共存するのも世の常で、不況にもめげず、その装いで街のイメージを刷新し、その生き方で因習的な道徳観や男女関係を変えているのが「モダンガール」と呼ばれた女性たちである。都會では

呉服店はデパートになり、ダンスホールやカフェもできた。録は写真のようだ。和服の似合う美人だったが、でも、その行動力はさっぱり「モガ」だった。

島崎家は世田谷に、敷地内で

乗馬もできるような大きな屋敷を構えていた。客分がしじみ出入りして、見知らずの人びとが平然と朝食をとっているよ

うな日常であったといふ。その家の六女だから「録」と

やつてきたモボとモガ

上電西桐生駅から東に向かって本町四丁目交差点の少し左手前に、かつて「北京料理富士」があった。富士という純和風の名に北京料理の冠をつけたアン

バランス、その外觀は関係者の

わく「奇妙奇天烈、妄想の中國

風」の木造3階建てで、1階は

イス席のホールだったが、2階

と3階は日本座敷で、2階の通

路の両側には玄関つきの部屋が

すぐ、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

古い蔵群の扱いについて、文化

理が、織物のままで接待される

全国のバイヤーには評判でも

てなす側の貢継商らが盛んに利

用した。個室だから商談もしや

まく、店は薄利に徹したが、客

単価は約8千円。それでも、2

次会は桐生の富士だと、得意客

は県内各地からやってきた。

過日亡くなった小池久雄がそ

のむかし、本町二丁目の矢野の

つごもりの新月はまた満ちて、月日はめぐる

第2章 富士のかあちゃん ②



その後、本町四丁目からどや旅館の西隣に落ち着いて、勤めた

館の西隣に落ち着いて、勤めた
らすパチンコ営業許可第1号を

めまぐるしい。洋食屋にあきた
され話題になり、単行本は当

時爆発的な人気を

呼んだ。

訳者は萬朝報の
創刊者、黒岩涙香
である。内村鑑三
や幸徳秋水、堺利
彦、佐藤紅緑など

個性豊かなスタッ

フと論陣を張つて

簡単・明瞭・痛快

をモットーに読者

をひきつけ、数々

の暴露キャンペー

ンを開く。「三面

記事」の言葉を生

み、一方では初の

ボーランドを始めた、とい

う。

かく時代のつかみの早かった鍋

一郎の本領の發揮である。

そして「これからは中華の時

代だ」といだし、48年、北京

料理富士の原形が固まるのだ。

桐生にきた鍋一郎はまず、桐

生俱楽部に併設されていた桐葉

軒で西洋料理を学び、後に割烹

だるまに勤め、1927年、2

人で本町五丁目に富士電気料理

店という小さな店を構える。電

気料理とはいまならず、最新

やモダンといったフレーズだ。

下関・春帆樓とのゆかり

両毛織物新聞社発行の『昭和11年版桐生市案内』には市内の旅館、料理、飲食、芸妓置き屋の詳細が載っている。鍋一郎と録の店は「洋食レストランダルマ」の屋号で紹介されていた。

桐生にきた鍋一郎はまず、桐

生俱楽部に併設されていた桐葉

軒で西洋料理を学び、後に割烹

だるまに勤め、1927年、2

人で本町五丁目に富士電気料理

店という小さな店を構える。電

気料理とはいまならず、最新

やモダンといったフレーズだ。

その後、本町四丁目からどや旅

館の西隣に落ち着いて、勤めた

らすパチンコ営業許可第1号を

めまぐるしい。洋食屋にあきた

され話題になり、単行本は当

時爆発的な人気を

呼んだ。

訳者は萬朝報の
創刊者、黒岩涙香
である。内村鑑三
や幸徳秋水、堺利
彦、佐藤紅緑など

個性豊かなスタッ

フと論陣を張つて

簡単・明瞭・痛快

をモットーに読者

をひきつけ、数々

の暴露キャンペー

ンを開く。「三面

記事」の言葉を生

み、一方では初の

ボーランドを始めた、とい

う。

かく時代のつかみの早かった鍋

一郎の本領の發揮である。

そして「これからは中華の時

代だ」といだし、48年、北京

料理富士の原形が固まるのだ。

探訪・桐生の近現代

昭和天皇と皇后をお見送りする初子
(1958年9月)

取得したり、電気自動車の入
ポートランドを始めた、とい
かく時代のつかみの早かった鍋
一郎の本領の發揮である。

そして「これからは中華の時

代だ」といだし、48年、北京

料理富士の原形が固まるのだ。

つごもりの新月はまた満ちて、月日はめぐる

富士のかあちゃん・番外編

彼女に引き取られ、世田谷か
やつてきたのが8歳、ちょうど
このころだ。少年の心は西も東
もわからぬ戸惑いを抱え、揺わ
っていたが、そんな折、桐生織物
会館で開かれた催しで彼は、後
年の仕事にも影響する大事な山
会いを体験するのである。

との座談会と式場の講演「山下清とその作品について」があり、11日の会場開き後は毎日会場に顔を出し、ほかに新里のつじ丘学園での座談会や織物工場の見学など数々の予定をこなし、18日帰る日程だった。

写真は記者会見にのぞむ放浪画家。隣には式場が並ぶ。以下はそのやうとりの一部である。

桐生は初めてですか」「これで3回目かな、4回目かな。戦

「ことになつてゐる。放浪時代
といふなどどちらがいいですか
『いまのがいいかな』
山下清は22年東京生まれ。知
的障害者施設で学んだ貼り絵で
才能を發揮し、医師の式場に
よつて世に紹介され、梅原龍三
郎らに絶賛された。38年春の銀
座での個展では、画廊の床が満
員の観客で踏み抜かれるほどの
盛況であったという。ふだんは
市川市の八幡学園にて、ふつ

並んだ。長い行列ができるといふのによつて、急ぐことなく、山下は一枚一枚丁寧に書いた。

それは、山下清と字を書いているのではなくて、横線を引いて縦を伸ばすという具合に、頭の中の映像をそのまま写しこむような独特のサインだった。半世紀を経たいまでも、大切にしまってあるそうである。

「山下は、見たものを映像として記憶する驚異的な能力を持つていたといわれている。貼り絵の制作はいつも学園に戻ってから取り組んでいたらしい。

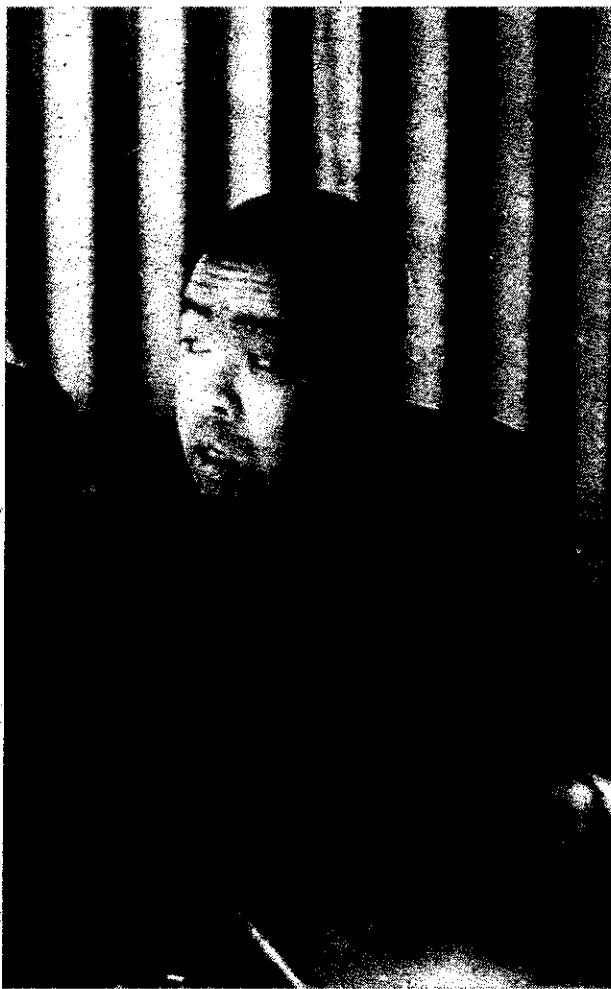
『駅は変わらない』。戦時中から59年までの桐生駅は、彼の目にちはそう見えた。たいへん貴重な証言だと思うのである。

(次回は26日 青木修記者)

決意に満ちた顔をして、かたじきも離れなかつた。当時、それが自分の心にどんな影響を与えたかよく覚えてほいないが、あとになつて考えると、神戸の気持ちはありがたく、胸にひとつといふところがあれば充分ではない。あいつは俺にとって、充分な歩き始めた頃多のあとを追つて音韻んで、言つた。

「バカズのみんな」何かしてやられた
切つてくれたお札をしないと」

お前はもう死んでる。
お前はもう死んでる。



記者会見場の山下清画伯(桐生市役所で)

探訪・桐生の近現代

(文中敬称略)

争が始まつてゐるところのこと
がある。河の用で書いたのです

としなくなり、放浪を繰り返し

富士の特大前菜の一皿。(2)

あ
し
な

20

264

北京料理富士の島崎録が「桐生の三天女傑」に数えられていた。1950年代末は、毎日がお祭りのような店内であった。毛鉤職人島崎憲司郎(64)が

間、期間は59年2月11日から18日まで、山下は育ての親の式場隆三郎とよたり、9日夜に桐生入りし、翌10日は市役所で記者会見に臨み、続いて各界の人

県のいちばんはずわだね」。裸の大将」という映画を見ましたか」「みたけどそこが多い。映画だからおもしろくなるんだな。ぼくのしながらことが、した

れ、同名の映画が58年10月に小林桂樹主演で封切られた。桐生での作品展はまさに映画のヒット中であり、こうした旬の催しを用意できたという事情ひとつ

といくなり、放浪を繰り返したことでも知られている。太平洋戦争のさなか、何度も学園から消えた。桐生にきたのはさきつとそのころのことだ。

「兵隊の位」が口癖で、あてずっぽうのようでいて、本質を射抜く人物評だったなどといふ。自身は「鬼のへや」を見



つごもりの新月はまた満ちて、月日はめぐる

富士のかあちゃん・番外編 ②

名物女将の
人心掌握術

島崎錠一郎と録が桐生で店を始めた1927年は、西桐生駅(28年開業)周辺の道路整備が軌道についた年である。

まちの人口は25年の国勢調査で全国の都市中71位、30年が63位、35年には50位と、著しい発展過程にあった。まちなかでガス敷設が始まったのも27年。桐

生で最初の大型店「矢野デパート」が本町五丁目に誕生し、モーボ・モガが闊歩はじめたのも同じ年のできことだった。

北京料理富士の前身「レストランダルマ」は、錠一郎の才覚で、東京銀座の有名店「カフェー・タイガ」の雰囲気をいちはやく持ち込んでいた。それが店の

桐生市内には料理店が数多く

あつた。部屋の内装は頻繁に手

が入るため、半世紀も前の写真

の写真は地方紙各社の面々だ。

桐生市内には料理店が数多く

つごもりの新月はまた満ちて、月日はめぐる

富士のかあちゃん・番外編



写真① 余興の支度を整えた客。後列
左端に前原悠一郎、隣に金子竹太郎
(市内料理店)

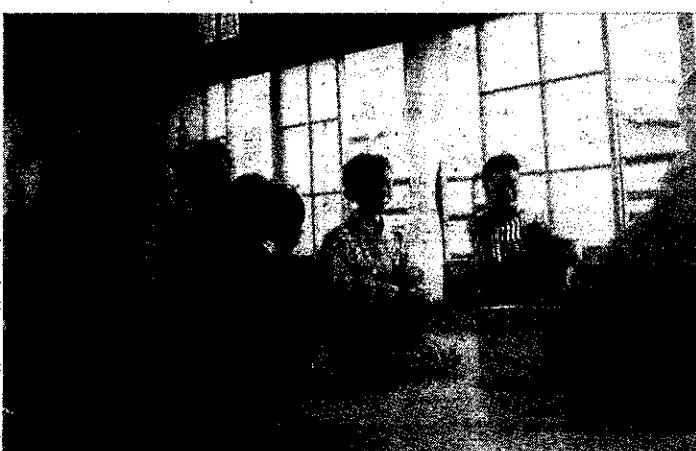
遊びのなかの文化

郷土の先達前原悠一郎が「1956年、書き綴つてきた桐生の近代の変遷を桐生タイムスに寄せてくれた。本紙はこれを「前原悠一郎翁思い出を語る」のタイトルで連載し、2年後に出版された。「桐生の今昔」(編集発行・桐生市役所)の誕生である。このなかで前原は、本町五目の桐生館が、明治期の機場の人びとが待望した大宴会場設備の料理店であったことを紹介し

活躍がめざましく、店は著しく繁盛したと、こう書いている。写真①では、その前原がカツラをつけて箱を担ぎ、後列左に立っている。隣にいるのが晦魄環照第一章でもたびたび登場した工業教育家の金子竹太郎だ。戦争で一時休業した桐生館は、のちに老舗旅館金木屋の経営となつて継続したが、同家に嫁いだ松島文子の話によれば、旦那

探訪・桐生の近現代

(文中敬称略)



◎ 春番 (1957年)

く内心樂しんでいたらしい。
とはいへ、ときどきにわがままも通じたくて、島崎憲司郎は料理人時代に他の店で宴会中のなじみ客から「富士の料理が食いたいから出前しろ」という注文を受けた。無理難題が言えるのも旦那の自慢のつだつた。

当时的芸者衆は富士の料理のファンが多かつた。「ほんぱさん」と愛称されたえびのすり身の変わり揚げや、貝柱や干し芋をたっぷり入れた本式のシューまい。「あがまた食べたびをたっぷり入れた本式のシューまい。「あがまた食べた

み」と愛称されたえびのすり身の変わり揚げや、貝柱や干し芋をたっぷり入れた本式のシューまい。「あがまた食べた

いね」。昔話に花が咲くと、鉄火肌の名物女将だった錆の懐かしい思い出話で盛り上がる。

「あのかあちゃん」と付き合つたんだ、何があつても驚かないだろう」。店を閉じてのち、フライタイヤーとしての地歩を固め、活躍する憲司郎に、かつてのなじみ客が向ける言葉だ。

そのとおりだと想う。そして

49 お休み処（3）

「橋リバーサイドハウスのみならず。ここに隠れているのはわかっています。こんなと隠れるぐらうだいたい、早くこの町からだといつてください。——じいじけー」

吾郎は大きくカーテンを開いた。

「じいじけー」と囁和しながら、拳を高く突き上げる集団の姿が目に映った。

なんだ、どうした、と動搖した声が、ギャラリーのなかで上がった。

明日の色

連載267

新野剛志・作
かめ ごうし
亀澤 裕也

衆はよく通者で、前原や金子のように口じりとそれぞれの仕事場で堅物とか生真面目で通つて、衆の腕のみせじいである。

写真② 桐生市内の見番（1957年）

いたらしい。「ほいえ、とさにわがままも通して、島崎憲司たくて、島崎憲司郎は料理人時代に他の店で宴会中のなじみ客から「富士の料理が食いたいから出前しろ」という注文を受け、持つていったことが何度もあった。無理難題が言えるのも旦那の自慢の一つだった。

いたらしい。「ほいえ、とさにわがままも通して、島崎憲司たくて、島崎憲司郎は料理人時代に他の店で宴会中のなじみ客から「富士の料理が食いたいから出前しろ」という注文を受け、持つていったことが何度もあった。無理難題が言えるのも旦那の自慢の一つだった。

當時の芸者衆は富士の料理のファンが多かった。「パンぱさみ」と愛称されたえびのすり身の変わり揚げや、貝柱や干し大根をたっぷり入れた本式のシューマイ。「あそれがまた食べたいいね」。昔話に花が咲くと、鉄火肌の名物女将だった録の懐かしい思い出話で盛り上がる。

「あのかあちゃん」と付き合つたんだ、何があつても驚かないだろう」。店を閉じてのち、フライタイヤーとしての地歩を掴め、活躍する憲司郎に、かつてのなじみ客が向ける言葉だ。

そのとおりだとと思う。そして富士の日々の仕事を通じ、誰に対してもつねに同じ態度で接す

「橋りバーサイドハウスのみなさん。ここに隠れているのはわかっています。こそぞと隠れるぐるいだいたら、早くこの町からでていってください。——でいいけー」

吾郎は大きくカーテンを開いた。

「でいいけー」と唱和しながら、拳を高く突き上げる集団の姿が目に映つた。

なんだ、どうした、と動搖した声が、ギャラリーのなかで上がつた。

「いまの、何？」

振り返ると、魁多が壁の内側から顔をだしていった。

先日の、眼鏡をかけた女がまた先頭に立つていた。女のかけ声に続いて、でいいけーの唱和が再び響く。さすがに商店街の人間は混ざっていなかった。

(第2章完) 青木修記者

山家集